

高齢社会を生きるのはむずかしい

人間総合科学大学 人間科学部 教授 丸井 英二

ときおり考える。私たちはひとりでマラソンを走っているのだろうか、それとも皆で駅伝を走っているのだろうか、と。

性別に年齢構成をあらわす人口ピラミッドは、今は壺型だが、その昔、本当にエジプトのピラミッドの形をしていた。そんな頃には、数少ない高齢者は知恵者で、希少な資源で尊敬されていた。最近はやりの「ソーシャル・キャピタル」のひとつのリソースだったわけである。いまや希少資源ではなく過剰資源、ひょっとすると余剰資源かもしれない。

仲間が増えると本人たちは楽しいのかもしれないが、碌なことはない。徒党を組みはじめ、ひとりでは恥ずかしくて出来ないことを始めるようになる。これは恥ずかしい。

希少価値であれば、存在していることに価値がある。ひとり淡々と走り続けるマラソンランナーの姿は美しい。しかし、大きすぎる先頭集団はあとからくる選手の邪魔になるだけ。だからといって自分だけ先頭集団から抜け出すこともできない。

どうしたらいいのだろうか。ひとりでいることを大事にして楽しむか、タスキを渡すことだろう。駅伝のすがすがしさはどこから来るのだろうか。米国などはリレー

でもバトンタッチがうまくいかずオリピックでも失格になるほど、自分だけを大切にすること。いつまでも自分が走ることでなくて、タスキを渡して次の選手の走りに期待すること、それが先行ランナーの役割である。日本はバトンタッチの素晴らしさに定評があったはずである。

たまたま、結果として長生きすることもある。それは仕方がない。気がついたら長生きしていた。そういう人生はいい。しかし、自分だけの長生きを目的として生きるなんてつまらない。もちろん、わが身を振り返ると、やはり健康に、できれば長く生きたいと思ったりもする。この年になっても、新しい発見や新しい出会いがあって、やはり面白いことも多い。でも、早めに次のランナーを見つけて手渡して、拍手してやることを忘れては、次の時代は来ない。

声を出すことはたしかに必要なだが、高齢者がいつまでも大声を上げるとうるさい、邪魔になる、いなければいいのにと思われる。良寛さんの「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがるる妙法にて候」という言葉を思い出す。高齢社会をきれいに生き抜けるのは、なかなかむずかしい。

◇ PROFILE 丸井 英二 (まるい・えいじ)

東京大学医学部保健学科卒業。大学院修了後、東京大学医学部疫学教室助手、医学部国際交流室講師、東京大学留学生センター教授を経て、国立国際医療センター研究所部長、順天堂大学医学部公衆衛生学教授等を歴任。2012年より人間総合科学大学人間科学部教授。ダイヤ高齢社会研究財団評議員。専門は疫学、国際保健学、健康と医学の歴史など。